





畫圖 翠葉堂 半山

浪平住
吉の浦
汐子
将の圖



た
樹中人麿

やうど

わ

子

卷七

右
已

子 4

秀

七

和

ゆき

九
洞

52

善

中

卷之六



天智天皇

秋の国 あきのくに

乃

庵

○

名氏

わ

補

疾



貝桶かいおけ 互の 國つ

奥のけの弦ふんひとむ

有り客員主員とあり

ひまわりを同^め志^しする

やうふびすべしな國とな

毛モウ
世セ
々カ
々カ
々カ
下
客員

も
さ
な
き
き
く

いれ
まゐりて
る

ひさ
のて
あり
も

まゝの
まゝの

男より先きとてうて後

行ふやうなものである

あり奥の前後左右あり

ひふふとのうてみろ

おとを思ふ^とにきこゆひ



人歌仙



持統天皇

まことの夏

白の

夜

天

ふく



柿本人麿

あまの

ふ

尾の

志

な

ひ

ひ









石 壬生忠貞

1715

かきつばた

中

平西

秋乃

わさくといふ

きつ

右中勢

Handwritten notes:

20

Handwritten notes:

Handwritten notes:

うん

卷之四



僧心遍昭

天津風

五

吹

五

しなの

志



陽成院

蔬
子
根
汁

峯

お

のち

愛を

劉

卷之四



琴乃事

日本二粒の山神弓六子城

なまのほろ物あま乃

命をたもてしむるを
幸^{さい}とてしむるを
幸^{さい}とてしむるを

今用ゆるい事と云ふ素の装束

服と云ふなりしなり十五經



後天巡天神の御のたま
 には、あふ磯、許さふ三
 種の神家の内、貴境我を
 コノおとそふとんとの
 にくく、神神とて、八咫
 日とも、かうそ、後人皇第十代
 皇、神天をのほとこ、天鏡
 の神威を、さうと、天和の
 磯城の都に宮を建て、天皇
 一人、心事を、神鏡のほろと、事
 ども、貴都ふに、さうと、事
 々、後天巡、元年、九月、心裏、正
 の、神鏡とひ、さう、御ふ
 の、さう、を、同、神と、さう、り
 神と、さう、り、神鏡と、同、神
 と、事、さう、り、神と、神

人

[illegible]

以用之

紀



志



〇戲後血わくさう年々
 劇の代々南粉や川時
 くらやねるやうて終の
 ころの血一まづくへり
 にをすせ根束と事四
 方一切の事と有度
 ぬのふいの高申餐のこ
 まにれられいー 胎衣を
 甲う後方へ
 胎衣やうふいふまれり
 拾とあふさうのまじり
 さんで血より人幸に及た
 三年みとあふさうと葉
 一うやう用
 さんでねれふの終の
 まきやうて葉一うやうの



人間生涯の流業
 せわしうと目めとこと
 いふ日はあつたをね
 する野たの絶うさ
 いふの絶うとあふさ
 五箇の男の二日あふさ
 氏非へあふさ
 雪初め百れ目あふさ
 としめり男のたのめ
 にあふさ男のたのめ
 わけくめさうのさ
 作と日二葉のたのめ
 いふさう一たのめ
 葉を二葉の十月十五日
 死の二葉とあふさ



年中様は月と
 正月 元日の本は
 月のうしろの日のうしろの
 元日 二のあつちのう
 今日 三のあつちのう
 作らうとくものう
 屠蘇酒のいし年中のわ
 ぬとのくは慶のう
 ても美子のう
 めたのう
 年一のう
 屠蘇のう
 白木柱のう
 木柱のう



清原深養父
 夏に夜に
 宵に
 明に
 雲のいづ
 月在るら

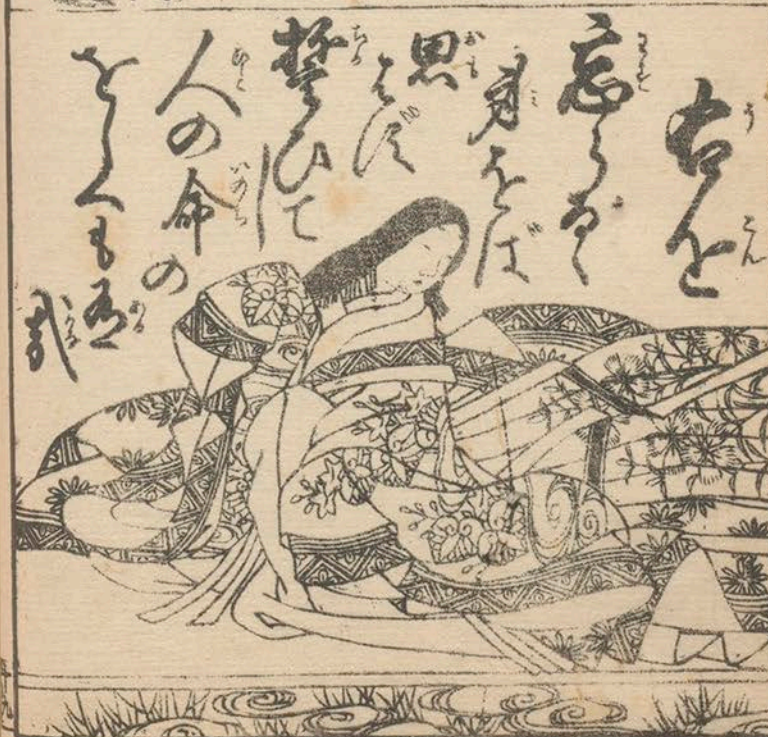


小豆のう
 小豆のう
 小豆のう



久屋朝康
 秋乃
 玉や

七日 七草の湯とてやうに
 目七草とてのりやうと食
 とまふ年中にあとのどしと
 きてやうやうをさうさうと
 づつやうのやうとさうと
 一うこれとさうと
 十五日 たまはひり 俵紙
 乃き紙とたうとさうと
 お仏經やうとさうと
 けりふ仏經やうとさうと
 やたさうとさうと
 大内ふの湯とさうと
 とさうとさうと
 五年 四創すく今や
 を毎年これやうとさうと
 うちふとさうと



七ク 七クの花より雲出
婿と嫁女より入二里毎年
今う着たりやを唐境といふ
國の武將も伯陽といふ所て
さりに星もあつても唐に批
を奪い帝元九景と海竹紙
七八拍子をもまきよきに空
の糸よりけりる方もとちひ
あるものこそ翠花探トは白
或は夜ぬきとうともそのろく
の小袖と年になくかすかりえ
平勝元年ゆれまきき草の
露と雨振のまぶ小衣をうき
る向く影ひもろふ影われ
む三〇の心はゆきをうき人
とのへん



七ヶれいのろふぬきさうん
 ぬきさうん ぬきさうん
 天の川月けりぬきさうん
 ややぬきさうん
 ぬきさうん ぬきさうん
 星のあふぬきさうん
 ぬきさうん ぬきさうん
 七ヶれいのろふぬきさうん
 ぬきさうん ぬきさうん
 天の川月けりぬきさうん
 ややぬきさうん
 ぬきさうん ぬきさうん
 星のあふぬきさうん
 ぬきさうん ぬきさうん

漢德公



[illegible]

七月十六日申先づいひていふ
 事ありと親をいれ人ふも
 とまのりといふ國傳を御不意
 とてふは親の是とてある事
 の時時ば全休の儀式ありや
 言へばそれふもさういふ
 意圖全休といふは因てさ
 母の言とていふとて此方と
 の言ありと母は慍鬼なり
 のいふをいふをいふとて
 けうもいふとていふとて
 とていふとていふとて
 人の足元はさふきふと事
 言ひの申のいふとて
 十月の午のいふとて
 八朔八月朔日と申す

源重之

風をい

名

浪の

其の

くけく

抑も此の家



本中法社宣期

沛

福至

火

疾

ひる
く
く

物欲之變





漢文帝

[illegible]

武部

先づ
のびて

子方

分

雲漢

救世の

月



和泉式部

あきらむ

うのせれ

外乃

出

今^{いま}てゐ^いの

五
三
二
那



元々子
 先き子二親のつゝ孝り
 ふん人なりすう年七十の
 及ぶまふふふふふふふ
 て小児の形ふなり二親のふ
 年ふふふふふふふふふ
 今ふふふふふふふふふ
 是もふふふふふふふふ
 られ其ふふふふふふふ
 うふふふふふふふふふ
 又親ふふふふふふふふ
 又人ふふふふふふふふ
 をふふふふふふふふふ
 のふふふふふふふふふ



元々子
 先き子

元々子
 先き子二親のつゝ孝り
 ふん人なりすう年七十の
 及ぶまふふふふふふふ
 て小児の形ふなり二親のふ
 年ふふふふふふふふふ
 今ふふふふふふふふふ
 是もふふふふふふふふ
 られ其ふふふふふふふ
 うふふふふふふふふふ
 又親ふふふふふふふふ
 又人ふふふふふふふふ
 をふふふふふふふふふ
 のふふふふふふふふふ



度子寒むハ、けり時母一
かゝるより父すは妻とむ入
二ノ子と有りは妻継子乃
岡子寒むと帰るをきくふ
其の往をとり有おもて着せ
たりも岡子寒むゆ是と帰
どあそんや父是とる大不忠
とほ妻と去んと岡子寒む又
ぞ縁め母とある二人の才能
赤い髪一人をさへ福おバ
二ノ子の温ふれ度にとりし
又より依り妻成ゆと云
ぐろなりは妻岡子寒む考り
を感に思ふはかり情をもと

ちへ

朱

の
初

ハ
多
様

久々

あひ



こしきぶのかい
小式部内侍

大
江
山

來イ

の

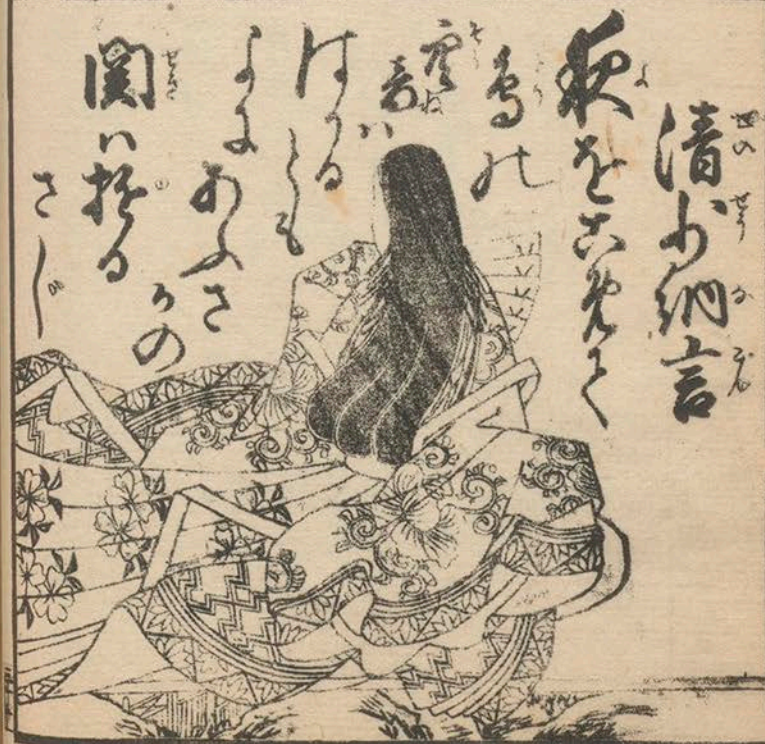
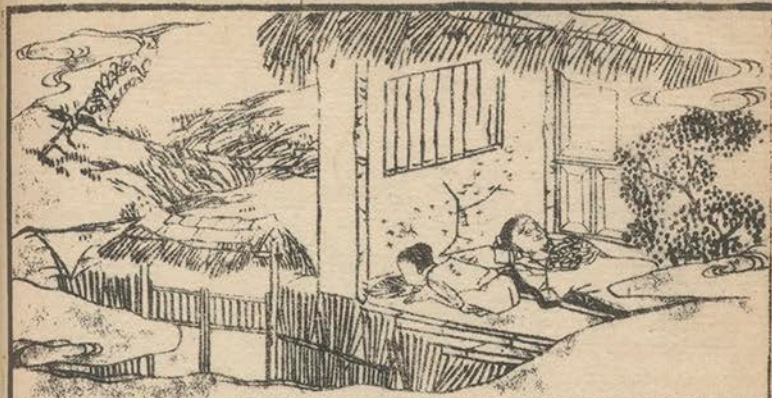
人

ま

ふんぞり

天乃





清少納言

夜をみえく

もれ

お

け

う

園

新詩

妻侍母おつて孝りたき人
なり母おはのあか飲を好し
又はおのまゝと好くふくま
の書おひつて六七里をて
はのあか飲せり妻の孝り
人おつてのあか又はお
終てしうく姑おそりま
の孝りてまゝ一日を
のわうふはあまねか
あはま姉おはなれとあ
母おあつてうく流し
まゝくまゝおはなれと
おまゝおまゝの孝り
なり見えん孝りてまゝ

た京たま道

今

井

ん

ん

人

傳

り



[illegible]

末

[illegible]

久松

唐主人

唐主人は崔氏の人の事也
 姓は崔、字は季康、姑は崔氏
 老く齒をぬけ、食を食ふ
 我れ乳汁を姑のませ中
 あつた多きなり、崔氏姑は
 所は六元を下とむ甘み
 一門の人々と呼集り、胸を
 扱ふ、のろむ、我れ姑の唐主人
 小唐はもと唐と云ふ、崔氏
 唐主人の孝貞、見知り、學
 果して唐主人の唐主人なり

楊香

楊香は魯國のなり、幼き時
 父は山中伐木、母は山に
 の大虎あり、母を喰ふ
 楊香推して、母を喰ふ
 母を喰ふ、母を喰ふ、母を喰ふ
 我れを喰ふ、父の命を喰ふ
 虎の命を喰ふ、母を喰ふ
 楊香は魯國のなり、幼き時
 父は山中伐木、母は山に
 の大虎あり、母を喰ふ
 楊香推して、母を喰ふ
 母を喰ふ、母を喰ふ、母を喰ふ
 我れを喰ふ、父の命を喰ふ
 虎の命を喰ふ、母を喰ふ

お大僧正行尊



周防内侍





三條泥

あはれ

浮世

ふひき

庚午九月

能
固
注
碑

わ
ひ
吹

三金

乃

あ
あ
あ

后

まゝの河

小春如多

孟宗

子孟宗、吳國の人なり。幼而見て
父を孝しむる母と在りて、
晋の武帝は仕々母事をして
令たりしに、おたふさうするや、
の相とぬき、もと孟宗急く水
く直せたり。折すゑの事あり
小母等へ入せん。ねえお
すて王孟宗は、数よりうむひ
まじも、言ふき折なしむ。母の
あひんや、なり。母の事をい
かゞして、昔の中法伏つた天
をも孝なむ。孝のいや急死と
言ふの中法争、救ふべきや。孟宗
ふまは、くゆるく母に進むるを

郭くわく
臣きよ

郭巨河内南郷の人命郭
巨、母を孝けりて
母を三孝たりと
巨母に孫とるをかり我食物
とて与ふ孫を食ふとて
郭巨、母を孝けりて
母を三孝たりと
巨母に孫とるをかり我食物
とて与ふ孫を食ふとて

五選法

淋
石
篇
と

五
出
く

雕

い

其

わきれ夕書



大細云たひ
細云こ
細云こ
細云こ

夕

門田宏

毛氏

わ

槐風



王
祥

源後頼朝は
うぐさるを
人の
の
ふら
いぬぬよを

葉順

藤原基俊
 葵里
 こ
 も
 命
 秋
 いぬり



丁巳
蘭

丁蘭推れどもより孝りたる
人かりが幼少より父を奉り十五
才のとき父を失ひては其難を承
て又母の所を本係とせしむる
然れどもこれにても母を奉るは
或夜も妻あるものなりと云
母の本係の而て焦るる事なき
疾のく腫脹血がれ二日あり
妻より髪を剪りたるものなり
炭より丁蘭は父の本係のとき
カク平を奉係とて夜を妻
小と奉りては夜を妻
同の事とて本係とて國を奉
書の録ののりせしむるなり

法性寺弘明寺教院

和回

槽出之

足

久

雲井より

押
し
か
き

崇德院

於之

若小

萬

の

卷之六

子

わんざ



仁食、東の詩人なり。ふ、琴
 人、ふ、和漢の詩人なり。月、は
 者、も、多、事、の、中、に、月、を、観、
 任、く、孝、の、中、に、孝、を、観、
 師、多、し、吾、歌、を、う、と、と、と、侍、
 一、大、小、の、二、部、と、自、ら、え、あ
 る、様、子、を、時、々、と、は、な、
 り、ま、う、余、今、う、た、ん、
 る、の、う、た、文、人、詩、人、は、ふ
 情、を、放、蕩、し、る、者、な、れ、
 け、ん、と、う、た、を、観、お、う、
 ま、も、甚、だ、に、う、た、を、観、
 愛、者、と、観、し、な、り、
 小、風、虎、人、の、歌、を、観、し、

[illegible]

王^{ミナモトノ}親^{ミナモトノ}公^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}道^{ミナモトノ}忠^{ミナモトノ}世^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}
 官^{ミナモトノ}位^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}つ^{ミナモトノ}く^{ミナモトノ}耕^{ミナモトノ}して^{ミナモトノ}多^{ミナモトノ}
 し^{ミナモトノ}中^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}親^{ミナモトノ}公^{ミナモトノ}位^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}孝^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}を^{ミナモトノ}遂^{ミナモトノ}
 々^{ミナモトノ}我^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}父^{ミナモトノ}の^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}裁^{ミナモトノ}罰^{ミナモトノ}あ^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}
 文^{ミナモトノ}帝^{ミナモトノ}の^{ミナモトノ}な^{ミナモトノ}刑^{ミナモトノ}せ^{ミナモトノ}れ^{ミナモトノ}た^{ミナモトノ}し^{ミナモトノ}て^{ミナモトノ}大^{ミナモトノ}な^{ミナモトノ}
 順^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}文^{ミナモトノ}帝^{ミナモトノ}の^{ミナモトノ}位^{ミナモトノ}の^{ミナモトノ}方^{ミナモトノ}向^{ミナモトノ}す^{ミナモトノ}
 か^{ミナモトノ}し^{ミナモトノ}父^{ミナモトノ}の^{ミナモトノ}罪^{ミナモトノ}と^{ミナモトノ}守^{ミナモトノ}と^{ミナモトノ}下^{ミナモトノ}の^{ミナモトノ}振^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}本^{ミナモトノ}
 む^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}付^{ミナモトノ}け^{ミナモトノ}る^{ミナモトノ}か^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}本^{ミナモトノ}同^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}格^{ミナモトノ}
 々^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}格^{ミナモトノ}あ^{ミナモトノ}く^{ミナモトノ}母^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}死^{ミナモトノ}し^{ミナモトノ}に^{ミナモトノ}格^{ミナモトノ}あ^{ミナモトノ}は^{ミナモトノ}い^{ミナモトノ}
 々^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}母^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}雷^{ミナモトノ}と^{ミナモトノ}な^{ミナモトノ}せ^{ミナモトノ}れ^{ミナモトノ}る^{ミナモトノ}雷^{ミナモトノ}
 の^{ミナモトノ}た^{ミナモトノ}る^{ミナモトノ}な^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}墓^{ミナモトノ}と^{ミナモトノ}廻^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}と^{ミナモトノ}震^{ミナモトノ}え^{ミナモトノ}お^{ミナモトノ}
 々^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}止^{ミナモトノ}ま^{ミナモトノ}く^{ミナモトノ}廻^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}々^{ミナモトノ}る^{ミナモトノ}と^{ミナモトノ}と^{ミナモトノ}死^{ミナモトノ}
 々^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}の^{ミナモトノ}後^{ミナモトノ}近^{ミナモトノ}々^{ミナモトノ}も^{ミナモトノ}孝^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}す^{ミナモトノ}人^{ミナモトノ}
 々^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}い^{ミナモトノ}は^{ミナモトノ}時^{ミナモトノ}の^{ミナモトノ}孝^{ミナモトノ}り^{ミナモトノ}并^{ミナモトノ}と^{ミナモトノ}々^{ミナモトノ}々^{ミナモトノ}

たふさふさ

枯風

くも
雲の
くひ

元之

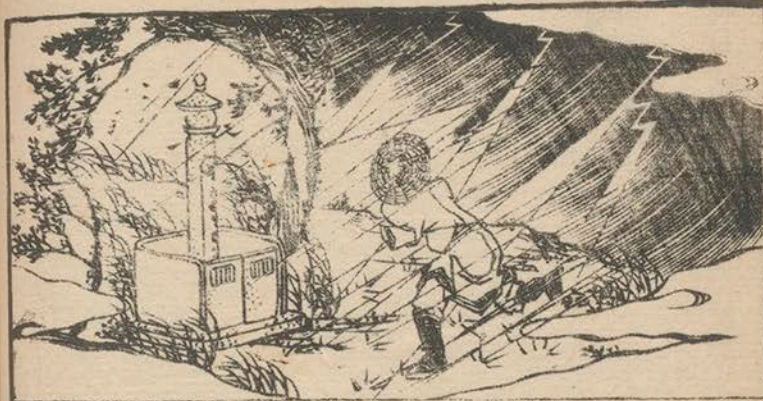
A black and white portrait of a man wearing a traditional black cap with a white band. He has a mustache and is looking slightly to the left. The portrait is positioned below the name '元之' (Genji).

ま
れ
ろ

新乃

月



[illegible]

うき
さん
の
黒髪
も
けさ
お
侍賢門院姫川

後徳大寺なるを
かきまを
うきを
な
うきを
ま
き
月を
強き



[illegible]

な

この

此

あひ

うしき

今を
あきらめ



後惠清

夜毛

相持

明

寝屋の

卷之四

清江先生



[illegible]

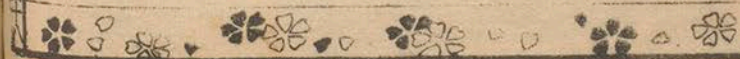
あふれ夕暮



一とびつらりしをやくてあ
 りふかーのてまぜ三べん
 際ふて又三べん際うを
 んふふて三べんう
 一茶葉のほろもとのけ
 ろひとまぜふりが一過
 際わりのとせんけやく三
 過は二の過はもんが
 ふふて三べんう
 一茶葉のわりのけやくや
 きのわとちふろがすぜ
 二べんう
 一わりの茶葉をけやくて
 中際りのけやく二べん
 一のけやくのけやく

一 せんがーのめい入
 一 ねえんがはううふ
 一 そのうでをうとうと
 一 めえんがー入讀てー
 一 四えんがはうて三えんが
 一 中讀いあふてん引出い
 一 いふとあけき立讀を
 一 一 黒も絶わさたは讀り
 一 四のけきく四ん人のあ
 一 たーうけく一入讀を
 一 志とお押ー格
 一 さりおふがうのめいさ
 一 いあ一牛に二合へん
 一 考く三師わく文研え
 一 うろをやりやくまー

ありふたんの素より
 てわりふたり
 一軒のたきぎせん
 の湯へおのゝき
 けいふふ（わふふ）
 一藍源とる入者まの
 地ふ
 一あふのたきぎせん
 のけをより月てはふ
 かつをきせん
 一ふふ（わふふ）
 せうとるふふふ
 けふ（わふふ）
 一堀の月とる入者まの



一堀の月とる入者まの
 けをより月てはふ
 かつをきせん
 一ふふ（わふふ）
 せうとるふふふ
 けふ（わふふ）
 一堀の月とる入者まの



無暇より心得
 先如振るものな目も
 ろくまのふすまに
 よりはきり裁奪あり
 ふれ左のや唱あり
 え天福皆東
 地福海
 一切諸取
 皆金満里
 又たの分とていなり
 ちやあゆみのそを
 られしものけしよりど
 といふりぬ
 あき晴のかへとも
 かへともうたふ

上へいふと
 あゝ昨のあひはまの
 をくまゝをさうらさ
 けふはけふ
 又女の衣振まうたふふたの
 かのトの衣をうてはさ
 あゝ昨のいひのまの
 をくまゝをさうらさ
 いふと
 あゝ衣振まうたふふたの
 けふのいひのまの
 きねさうて入目もと
 ねふさうらさ
 けふのいひのまの
 きねあふと目もと

きんさりなり
おしんた服を着る
いんたふ



まはるのち
あはるのち
あはるのち
あはるのち
あはるのち
あはるのち
あはるのち
あはるのち

男子の衣服裁縫吉日
しうの日 丁卯の日
しうの日 己卯の日

女の衣服裁縫吉日
辛卯の日 龍の日
辛卯の日

順徳院

百敷や

新



るはのまり
しうのり

女大業

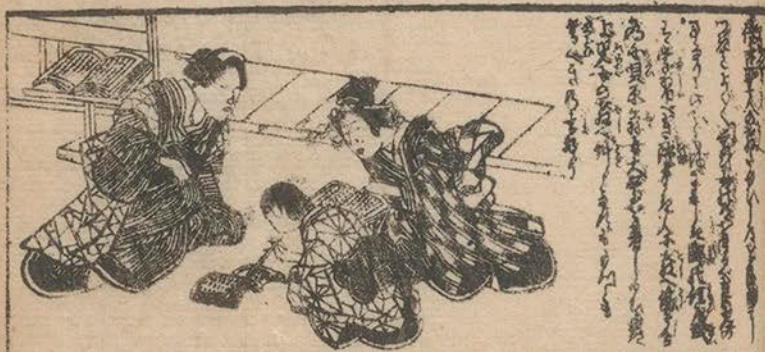
一丈女を成長

く他人の如く

乃男姑小はる

それを辨る

男より親乃



今朝ふとて
自^{みづか}に^し刺^され
細^この^こ條^{じょう}
一^い常^{じょう}に^{こころ}心^{こころ}に^が海^{うみ}
一^い女^にの^{みち}道^{みち}不^ふ解^{かい}解^{かい}
一^い若^わに^{むすめ}女^にを^{むすめ}置^おき^て
一^いあ^うり^まを^しれ^しむ^し事^{こと}
一^いか^れに^やま^もを^もを^も
改^かじ^めぬ^まふ^らう^とも
人^{ひと}が^しし^し事^{こと}

あゆむう歩^{あゆ}
と^とあ^あう^うに^に父^ふ母^ぼ
寵^{ちゆう}愛^{あい}と^と慈^じに^に
育^{いく}ぬ^ぬも^もを^をま^まの^の
家^けに^にく^く心^{こころ}氣^き
は^はま^まう^うま^まり^り疎^そ

一^い大^{だい}事^じも^も辨^わへ^へず
お^おし^しけ^ける^る今^{いま}後^ご事^{こと}
一^い父^ふ母^ぼの^の心^{こころ}を^を見^みて^て長^{なが}
き^きは^はな^な疎^そに^に成^なる^る事^{こと}
一^いま^まを^をあ^あら^らわ^われ^れ
一^いま^まを^を天^{てん}道^{だう}と^と思^{おも}ふ^ふ事^{こと}
一^い道^{だう}に^に背^{そむ}て^ても^も榮^{えい}る^る者^{もの}
一^い女^にの^の心^{こころ}を^を知^しる^る事^{こと}
一^い心^{こころ}を^をあ^あら^らわ^わる^る事^{こと}
と^と知^しる^る事^{こと}

それ又^{また}の^の男^{おとこ}に^に海^{うみ}
心^{こころ}に^にま^まを^を置^おき^て経^{けい}て^て
思^{おも}ふ^ふ男^{おとこ}に^に恨^{にく}み^みに^に
中^{ちゆう}に^にあ^あら^らわ^わる^る
心^{こころ}に^にま^まを^を置^おき^て経^{けい}て^て
心^{こころ}に^にま^まを^を置^おき^て経^{けい}て^て



一 花ふ長丁式を度
 以て集あひい見
 物成とた好い事
 一 短急なりと月の

又か来初あはれと
 謂ぐく男まは
 通きそのとおろ
 供なり是皆女子
 此親のくくあは
 申く明り

心保く人此物成
 私を原事
 一女張利根事
 万更ふ対を儀事
 一人名中云と金
 の熱い身と集い事
 一 衣被道とおれ
 一 災難成道一症
 見若ぬ事
 一 貴も徳も法あり

一女を害より心此
 勝是ふと若く下
 心結無欠女ん強
 眼怒く久
 見知く人成怒り
 云来句くおい

と云はれまはせ給ふ
む事

一人を執ていふ事
に智ありやと云ふ事

出家沙門は對面して

いふ事例を云ふ事

一系を源流と云ふ事

騎つていふ事

一丁の長短を云ふ事

石段の長短を云ふ事

さう云ふくは執て人み

先立人我恨嫉と

我父又隣里人を

清然われ人又傍わ

血をるゝ家女此乃

に違ふ形衆女い唯

和も唄我く欠

信小情你く静なる

哉と云ふ事

一女ふい難時と云ふ事

男女乃別と云ふ事

と云ふ事

一男を姑と云ふ事

一人の強弱を云ふ事

一修子に修子と云ふ事

和を和と云ふ事

一男を女と云ふ事

親を親と云ふ事

親を親と云ふ事

一道を守る人我恨い

われと云ふ事

和と云ふ事

一人来る時うが不機嫌
嫌ふまうせうと云
うが無礼の事

二月 陰曆



あやを見送りむ
座うへに右の
流し男女さし席
同くで衣衣裳を
之同く着小糸に
おきり処しと活せり

大町

右の山々さし小糸に
無礼の事
かきとくさし
膝母さし
先家さし
うは志さし
無事さし
まの心さし
そき天さし
強し雲道なり

物を清く
しもさし
あし
中へ
いさ及ぶ

陰にまほりて
 女后乃ちう陽陽
 未ださう年天地
 自然のまほりて
 夫婦の道天地
 未ださう年天地
 自然のまほりて
 夫婦の道天地

なみきり 飯初にを
 猿がはしれ 賊も
 小をきり べ水
 方赤の 雲も
 人きり 雲も
 中ふ事 雲も
 雲も 雲も
 女に 雲も
 中 雲も
 雲も 雲も
 雲も 雲も

三月

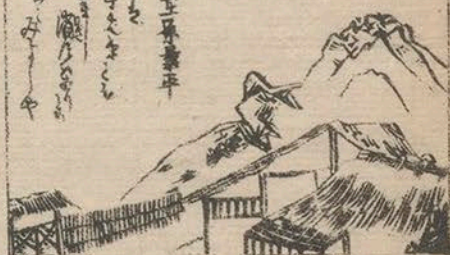
五原縣志

ちんちん

あふくち

2423

五



其人者親む事我
又々何いさふ事
いまだ減るれき
なりたてれと云ふ

学も見入り帳合
 旅も失ふも心成
 金石れどくに望
 志く義と守るべ
 一婦人々夫れ家と
 しが家とともふ所小

大工八

かゝる久事にはあ
事成好むといふ相
ふとれを破るそ
りもそ去る
後ろとてぬき
又半に程とて
生もふりやいとを
取らむ人々あるに
他人を智とて
いふをたうけず

唐土へ嫁を返る
 とふ家へふく
 事へふ事へふ
 今までの家へ
 あれとふまで
 天とふまで

にふさぐ一宮あり
沙とれ身代情るに
習ふむも有るに
女とくも學ぶりの
群れを仕ゆへり
女の法ある事と
ふ返しに教ふ
ままたに情き
美なりといふ
化の家おれま

のく族家乃美々我
仕合の由ゆへり
おまひ一度嫁と
そ家と出さふと女
乃乃とそ嫁と古
聖人の訓なり美

ふさぐ一宮あり
沙とれ身代情るに
習ふむも有るに
女とくも學ぶりの
群れを仕ゆへり
女の法ある事と
ふ返しに教ふ
ままたに情き
美なりといふ
化の家おれま

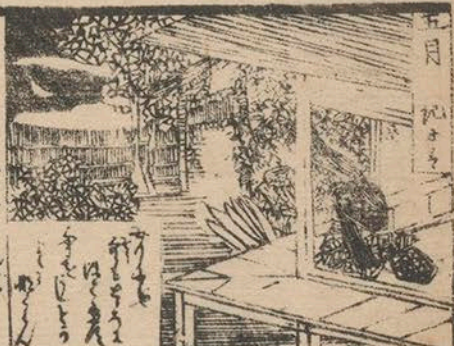
女れ道ふおむれ去
おれとき一生の恥
ありされを婦人
七去とそ美さ
いり一とそ嫁と順
女ハ去庫一とそ



子あき女も去べ
 先妻と娶い子孫
 相續れ為ふれ也
 然れども婦人其心
 平く好保う
 去く暇ある所くば

母のまの心後那
 かるい若と母
 甘じく煙草をい家
 心ふくはそと家
 人成石を月月
 本ふちと照
 心成夫とじそ人
 あふいそ石を
 事ね家
 女今川紙

こころの中も同姓乃
 子成夫と家
 あふふいそは妻に
 子取くも去ふ及
 三つは淫乱もまは
 こふふいそは格あふ



女子習教別狀
 夫より習教別狀
 は、まゝに巴板
 顔より外獲き

きれむうふ入小敷病
 もどれぬき候有ら
 ざる六又まゝとて
 情しくおいいさる
 親族も中悪く
 明り家々をまけ

武士に闘ふ事あり
 手なとらふ事あり
 の如くおぼえ門小
 八とやう沙面と大
 おぼえとさうさの
 我場小じやうとく
 威登一紙垂現
 い物とにね。机
 文度と城神捕
 板より筆いおれ

おまゝに去る一七に
 多し物と盗む心
 けふ此七去い皆聖
 人の教をわ女一友
 嫁一其家式也
 うれとへ候令再死

ちか藤乃に後て
ふかの文章一書
深おきるふの書
款れ初静と書い
と此處寧我討じ
然やとおおる
そいふ大勢ふい
がごとく照様自素
留めて去る勢高
に石竹とあり

富貴なる妻と嫁と
さむ女けりふ事ふい
く大なる事なり
一女子の口を
ふりて父母より孝
けりふ程なりこれ

わが事なり
盛を因る事なり
必く一大事なり
成す。も織姫の
道も。その間ど
と改立の。聖
様は。永に味方
なり。自ら。織
と。その織なり
ふら。なる。大將

おもまけ家なり
ては。も。暖。けり。親
と。ま。を。ま。い。て。孝
光。と。教。え。孝。行。と
重。と。し。親。の。言。ひ
ま。と。習。ひ。た。と。怪

采配死操う士率
 と指揮さうさ等
 我々裁縫ふ而耐
 八針縫乃れおその

六月 八日 雨



ぶ原とけうき嬢さん
 方北朝文の見すいと
 関金かゞ嬢さん乃
 勤き業はあふぐ
 うべ嬢の令
 うはははけりく宵

いやう物き
 得おとて精力
 励し、款とまふ
 刑のおいさる軍
 織り足縫よふ
 活るはたふく
 此心乃れわぐ
 文智舞妓人
 女々諸人

重くは美れと響姑
 に回くとも教ふ怪
 とく響姑り
 我々惜と能あふさ
 怒ねれとさうれ落
 はして城とそ川

先教養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教

此の由れは後より守
中好むものなり
一婦人等列女王君
なりまゝと主人と思ひ
弱む慎む事毎
怪しめ悔む事毎
六十二

先教養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教
養ありて又教

物より婦人の道
人は後より守
對し後より守
法より教養あり
和順なり守
忍びより守

多分中しと云ふ
 やく武士の膝痛
 引く立例と云ふ
 数一茶も飲せて
 戦場と云ふ事
 有り然る事
 不れと云ふ事
 こゝに立止る
 武士の
 孤身の

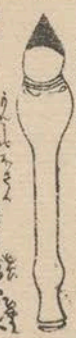
庫一付者
 なるべし
 第一若
 茂洲
 戎報
 志き



七月 紀元
 雪か
 多分中しと云ふ
 おる
 廣く

其下
 史同
 く
 昔
 たり
 せ

流清いようふく
 言ふも月くさき身
 ありあつる武士の
 今戦ひ女れさるゝ毛
 織纒やいふを以て
 ねね 幸しとて
 探ふさうふ糸



筆より文殊菩薩の描き
 さらさら 柳のしほ 四寸
 たり 三寸 たり 二寸 たり
 一寸 たり 半寸 たり 一
 寸 たり 半寸 たり 一

都路住来

ねね 幸しとて
 探ふさうふ糸
 川崎の新堀町あり
 外ふ川よりや程う若
 社好ともあくきや
 堀りなやうにむ
 されともうふはの母

庫一姐傳くこれ
 心小運くうん女
 丈成を何と天に
 五くもまき
 送れくこれ討て
 変曲く寸

一兄公女公をまこれ
 兄方おまを教下
 丈の親おま傳き
 悟由る世が響かぬ
 心ん度くおまを
 為中を匠く寸

色やふく平塚も
 えんぞとふふ大磯の
 城事とふふ小田原を
 八月 壬辰



睦しきとを嬢に
 んと恨ふ又嬢に
 親しき親おす嬢に
 姉又父の兄嬢に
 原くうや海を
 東国婚に同じに

箱根とくく作馬の
 海三浦のそとに非
 じや宿とて海に
 出たをくはさても
 東の東あそふ軍
 け根とてそとに
 おふふん痛あや
 体ふゆ舟の秋を
 戎思ふ無陣小を
 ちのふ後いふ所

一嬢にけん男に
 叔とてふ守男嬢に
 ちを練あし怒
 然とてけ嬢にけん
 そけいふあや紫を
 世おにけん

朝やきりすを豫河
のふしを以暮に数
いりまうふなやる
ふたれきもの乃ふ
やまむすの森枝
にやや藤原の大井
川さふおひいと金
若くも照る光日坂
ふねりふれぬ川
うけたり井も風の

却る夫小跡由是
人限おとこのなり
あま不義我に有ん
ふふ久と和をた
戎雅しと練下練
と藤とくおはま川

の月ふん月れはそ
と六候れそふの年次
時雨一以を舞枝
まきまきふれ
破神りはる舟白次
おもえより名をふ
二河やうへ候風さ高
丁新まきと世所は
はふふふふふふふ
赤坂の都南や高き

替くふく後又夫乃
心利ふふ時後練下
ふ氣をと黒く
了あていふげくま
に送り板くおくま
一言語代懐く多

間敷くちり家内
 ねを海へす
 一女の夢ふ心遣へ
 其心と堅く情み
 渡ふ夢
 早く紀夜を返す

屋せゝあんじき
 房も水はれそ
 未名石のそ野
 多々実も守れ
 大降とん無縁の
 九手ふんも
 都をそ無縁
 好もそ
 於信理来候

孫言はつ秘に
 久若因の事
 心と用お織縫
 緝無とく
 榮酒をどま
 まとく次
 次交舞妓

以信波三聯

以信波に保遠
 知利奴遠和加
 与礼智門秘索
 良武字乃於久
 也来針不江受
 安九幾由女免
 恵比毛世寸
 王五モセス

小秋降猫摘を
 此淫も屋事
 きく屋う守
 あど於人
 四十歳より内

嘉辰今月秋極
萬歲千秋樂未央

と為の代々みま

天々山々

天々山々

秋意吹来三盞露

採花并看青園霜

看花并看青園霜

看花并看青園霜

看花并看青園霜

七夕納歌

露凝別淚珠宜露

雲氣殘粧散未成

七夕納歌

七夕納歌

憶得少年長乞巧

竹竿頭上那絲多

丁井川

七夕納歌

七夕納歌

家破萬家

儉少費也

衣服飲食

衣食住行

衣食住行

衣食住行

衣食住行

衣食住行

衣食住行

親類友達下郊

等乃家室男

等乃家室男

等乃家室男

等乃家室男

近村廣々男女

近村廣々男女

近村廣々男女

風後^{ふうご}の夜夢^{よめ}跡^{あと}悲^{かな}
露^{つゆ}返^{かへ}明^{あけ}潮^{うしほ}風^{かぜ}不^ふ禁^{じん}

夢^{ゆめ}うきん

うきもはきき

七^{しち}の巻^{まき}

本^{ほん}

了^{りょう}びあや

りやうん

今宵^{こんしやう}鐵^{てつ}女^{にょ}後^ごて河^か
聯^{れん}月^{げつ}微^ゐ雲^{うん}一^{いつ}如^{ごと}羅^ら

一^{いつ}の巻^{まき}

和^わくし

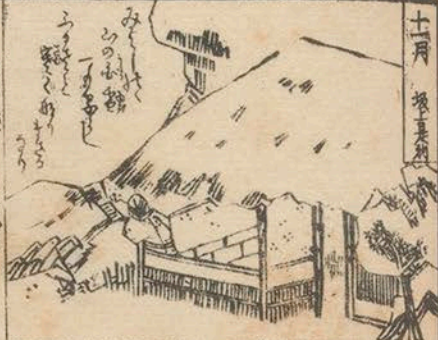
あき

七^{しち}の巻^{まき}

あき

あき

十月^{じゅうがつ} 振^ふ舞^ま舞^ま



四季^{しき}の文^{ぶん}

新^{あらた}玉^{たま}の玉^{たま}の玉^{たま}

あふり月^{つき}出^でる

納^{のう}め

あき

あき

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

あきなる用^{もち}有^あくも

[illegible]

推し書ふのし紙書

丁卯 春 三 本 家

中々之用由

象々若親北方物々

私わたくし—主ある乃なの親おや

類成文之寸

[illegible]

先生乃成

大光二

勅
事
以
家
親
乃

方城法

まの作をふりて

何々々々々

私年余候もの

卷之六

[illegible]

ちやうど傳上り
るゝあり
く

十二

在票先



一女を我親に嫁せしむ
は續けず男姑を
引を繼ゆへりて
親も亦嫌ひ大
切な思ひ孝行を
為す妹を後

美濃のふ

玄月之序

とて凡そ今時
の心はこれなり

ふくむち
はるかに

りふちやう
と

又月音与世文

端平其法程氏

ぞん
 あ

人
十

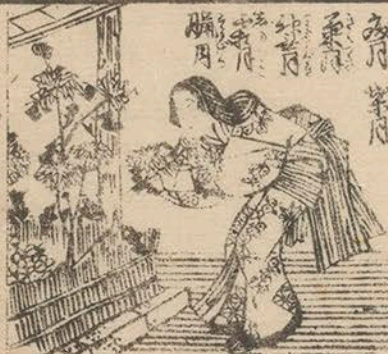
一の親乃家より
 二も希をふべ
 増く傳の家へ大
 形を使ときり
 三回文を屋へ又
 象親人れとれと

[illegible]

天光五

あはれ

秉性純正



九月廿五日
柔之

物もの々々々々々々
 ままののと男おとこ姑ぢやう姨いへの
 ああとああを家いえの人ひと
 合あひぬぬりりああれれ振ふ
 に渡わたるる歩あるくくそれ
 哉かな却さかてて君きみ乃なり

思ふ事なり
いふ事なり
一筆を
いふ事なり

同

思ふ事なり
いふ事なり
一筆を
いふ事なり

為しとく王婦人
り智恵なり
志くこと成候
下不恨と来
安し来来
ふみち他人かれ

きく事なり

思ふ事なり

いふ事なり

思ふ事なり

いふ事なり

思ふ事なり

いふ事なり

思ふ事なり

いふ事なり

思ふ事なり

恨し教ふとく恩
事成候とく安
捕下女は細
伝とく大切
睦睦と親と為
事とく守る下女

新編古今

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

蔵書

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

一筆

女

一筆

一筆

一筆

一筆

盡此心

一箇之先

四つ

ソレ

事

さ

お

知

は

つ

の

あ

あ

但家室に入

少く用

者

盡

一凡婦人

此

大光

誓

一

正

少

は

い

り

ま

は

ね

あ

あ

あ

順

我

智

姓

八

能

及

王化
衆女



又素女之事
女のあまのいづちをよじ
くわぐわと素女は
あまのいづちをよじ

中々なり

願戒と改去

中子智恵乃

市史子文此疾也
 市史子文此疾也

數
 子
 如
 去
 陰
 性

形に陸奥^ノ款^ニて

晴
——
新以女
男

に以て之を

同前
あふて然と

我を知り守りぬ人の

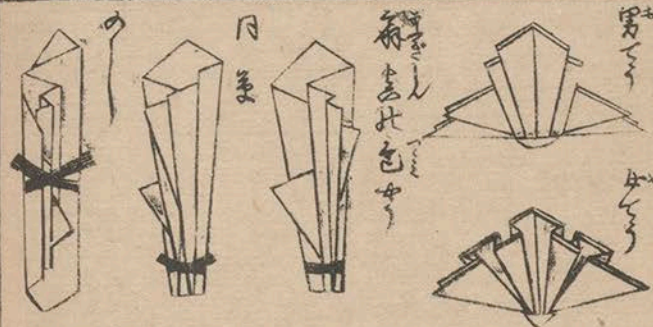
祇
る
度
に
と
き
と

毎
入
ま
ま
ま
ま

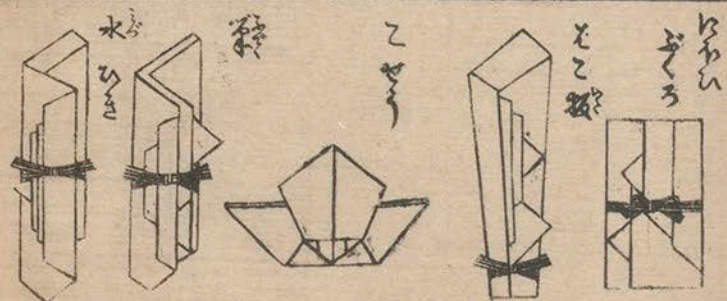
おと
うた

[illegible]

原瀬 折形之圖



これ其を成ず
事をも知し
科もたき人成
然と怒候能ある
飛と人を極と
てワづむと



五人知あり人ど
人よ悟まれ疎ま
きとみ那あ此
此仇とあると成
知れんはうあ
浅様しを育



箱
紙
の
上
に
包
む
方
法



箱
紙
の
上
に
包
む
方
法



箱
紙
の
上
に
包
む
方
法



是れも愛する弱

はるかにせぬ

形もあらず

何れもあらず

強くあらず

車一古の法は女



箱
紙
の
上
に
包
む
方
法



箱



箱



箱
紙
の
上
に
包
む
方
法

子成産と二日麻

乃下に問む

いふまゝと男は

下ふ娘女は地

家なるゆゑは

こゝに法は

女中名頭字

水姓 福 繁 守 文
 備 米 玉 光 南 重
 由 次 弘 永 長 竹
 梅 瑞 麻 系 勅 成
 品 梨 連 富 大 年
 大 姓 麻 吉 岩 虎
 我 玉 曲 久 兼 花
 為 苑 陸 薰 吟 越
 鈴 園 延 権 玉 壺
 金 龜 原 高 捷 今
 土 姓 重 作 中 島

我光之家守を
 後し我をせし
 子能くあり
 我をも憐るる所
 なく亦あはれ有
 人し云ねし中

六 齋 長 徳
 龍 院 佩 丹 衛
 就 節 孫 政 忠 品
 金 姓 由 幸 恒 好
 縫 衣 民 門 坂 権
 能 安 佐 家 市 君
 毎 富 葵 木 文 侯
 水 姓 綾 子 輝 秋
 常 松 晴 長 岩 石
 政 光 市 十 作 勝

侍る人
 あやまち我に
 是を人々憐る
 是れ中しに家守を
 敬ふ人々憐る
 はなれはる事

七三小次参
秋味系告元重
会来振方村表
初清辰園表由
あつてもよとて

大日本國

又蔵内

又金

山城宮

大和宮

河内宮

和泉宮

捺津宮

東海道

十季

あゝ能はく拙哉
おそれ怯下如新
心得ふは夫婦の
中ねらばうゝ和
庭きりさ来なり
く連をいゝ家此

修賀 修賀
志尊 志尊
三河 三河
駿河 駿河
伊豆 伊豆
武義 武義
上総 上総
常陸 常陸
東山道 七ヶ岡
近江 近江
飛騨 飛騨
上野 上野
陸奥 陸奥

内穂をふま
右へ條へ推す
時よりうへへ
又書付くお
候ふ人云張
そらうと志めよ今代

七

越示禁

能登第

越後

八
圖

丹後

國情

惠大

八子墨

吳州

傳中

五

道令如とおく

あゝ
とく
婚
姻
家
抄

ふくしまい事城

能
一
寸

身保寶

太北五

安雲齋

長門

六十四

漢張芝

變改篇

去
城
去

めを國

方 1

肥後
後
日

大偶オウ

孝
成

必讀之書

古語に人より

製煉して女

子城嫁之

と
知
く
十
百
錢
を

出子と成し

子之知

印座占

一、ふくひくち合掌
 二、ふくひくち合掌
 三、ふくひくち合掌
 四、ふくひくち合掌
 五、ふくひくち合掌
 六、ふくひくち合掌
 七、ふくひくち合掌
 八、ふくひくち合掌
 九、ふくひくち合掌
 十、ふくひくち合掌
 十一、ふくひくち合掌
 十二、ふくひくち合掌
 十三、ふくひくち合掌
 十四、ふくひくち合掌
 十五、ふくひくち合掌
 十六、ふくひくち合掌
 十七、ふくひくち合掌
 十八、ふくひくち合掌
 十九、ふくひくち合掌
 二十、ふくひくち合掌



衣服裁お仕やう

一、ふくひくち合掌
 二、ふくひくち合掌
 三、ふくひくち合掌
 四、ふくひくち合掌
 五、ふくひくち合掌
 六、ふくひくち合掌
 七、ふくひくち合掌
 八、ふくひくち合掌
 九、ふくひくち合掌
 十、ふくひくち合掌
 十一、ふくひくち合掌
 十二、ふくひくち合掌
 十三、ふくひくち合掌
 十四、ふくひくち合掌
 十五、ふくひくち合掌
 十六、ふくひくち合掌
 十七、ふくひくち合掌
 十八、ふくひくち合掌
 十九、ふくひくち合掌
 二十、ふくひくち合掌



一、ふくひくち合掌
 二、ふくひくち合掌
 三、ふくひくち合掌
 四、ふくひくち合掌
 五、ふくひくち合掌
 六、ふくひくち合掌
 七、ふくひくち合掌
 八、ふくひくち合掌
 九、ふくひくち合掌
 十、ふくひくち合掌
 十一、ふくひくち合掌
 十二、ふくひくち合掌
 十三、ふくひくち合掌
 十四、ふくひくち合掌
 十五、ふくひくち合掌
 十六、ふくひくち合掌
 十七、ふくひくち合掌
 十八、ふくひくち合掌
 十九、ふくひくち合掌
 二十、ふくひくち合掌

てらかなぬひやうくすひつた
もよう上ねんたりやひつ
かう工(様)なり

衣裳の時のち

すきひのち

押之とめ

うらふち

うらふち

いせぎとつ時のち

ほのふち

あきききと

さねとちて

入用とちて

きうふち

のけうふち

すのけうふち

たりあり

そふち

はけわ

うらふち



十六日 本村多すのふたふと
十七日 本村多すのふたふと
十八日 本村多すのふたふと
十九日 本村多すのふたふと
二十日 本村多すのふたふと
二十一日 本村多すのふたふと
二十二日 本村多すのふたふと
二十三日 本村多すのふたふと
二十四日 本村多すのふたふと
二十五日 本村多すのふたふと
二十六日 本村多すのふたふと
二十七日 本村多すのふたふと
二十八日 本村多すのふたふと
二十九日 本村多すのふたふと
三十日 本村多すのふたふと

小笠原折形之圖

衣服の時のち
すのけうふち
たりあり
そふち
はけわ
うらふち

又 今 日 次 日

左の目づれもふち

服のさうあつた板を

うらふち

針のうらふち

まふち

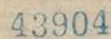
西のうらふち

うらふち

うらふち

うらふち

うらふち



明治廿四年二月十七日即刷
同 年二月十六日出板

以村庄助

大德心齋稽顙通順
萬年六新同

大第區阿波產中通今自卒者爲

大坂市南區順慶町通三丁目百零六番地

陵市南區順慶町通四國百七十九番地

名	吳	月	二	十
月	九	月	又	月
長	觀	萬	車	佳
月	月	月	月	月
月	十	月	六	月
月	月	月	月	月
月	十	月	七	月
月	月	月	月	月
月	十	月	八	月
月	月	月	月	月





名候月二十

月五	月八	月二
月長	月八	月二
月十	月六	月三
月十	月六	月三
月十	月七	月三
月十	月七	月三
月十	月七	月三
月十	月七	月三
月十	月七	月三
月十	月七	月三

明治廿四年二月十六日出版

發行者

以村莊助

著作

伴澤助吉

印刷

高崎虎二郎

賣捌所

以村欽英堂

43904

大坂市南區順慶町通四丁目百七十九番地

大坂市南區順慶町通三丁目百六十六番地

大坂市南區阿波座中通三丁目百六十六番地

大坂市南區阿波座中通三丁目百六十六番地



43904

明治廿四年二月十二日印刷
同 年二月十六日出版

著者 發行所 印刷者 賣捌所
大坂市南区順慶町通三丁目
大坂市南区阿波
大坂市南区通三丁目
大坂市南区通三丁目

二十二月			
月九	月八	月七	月六
月十	月九	月八	月七
月十一	月十	月九	月八
月十二	月十一	月十	月九
月十三	月十二	月十一	月十
月十四	月十三	月十二	月十一
月十五	月十四	月十三	月十二
月十六	月十五	月十四	月十三
月十七	月十六	月十五	月十四
月十八	月十七	月十六	月十五
月十九	月十八	月十七	月十六
月二十	月十九	月十八	月十七
月二十一	月二十	月十九	月十八
月二十二	月二十一	月二十	月十九
月二十三	月二十二	月二十一	月二十
月二十四	月二十三	月二十二	月二十一
月二十五	月二十四	月二十三	月二十二
月二十六	月二十五	月二十四	月二十三
月二十七	月二十六	月二十五	月二十四
月二十八	月二十七	月二十六	月二十五
月二十九	月二十八	月二十七	月二十六
月三十	月二十九	月二十八	月二十七



